

「英語文学」に関する一考察—実践例と今後の展開—

佐々木 隆

プロローグ

大学教員にはいわゆる教員免許状はない。新設大学等の設置に際し、いわゆる大学設置審議会の教員組織審査を受けることがある。この場合には職位及び担当科目、シラバスが対象となり、そのために個人調書（履歴書・教育研究業績書）を提出しなければならない。教育研究業績については、特に教職課程の場合には過去 10 年が対象となるため、継続的な研究が必要であると共に、活字化された業績のみが対象となる。

今般、2019 年度より教職課程では大幅な変更があるため、いわゆる再課程認定が行われ、教職課程ではこれまで「教科に関する科目」「教職に関する科目」「教科又は教職に関する科目」の枠組みが変更され、

「教科及び教科の指導法に関する科目」「教育の基礎的理解に関する科目等」「大学が独自に設定する科目」となる。英語の教職課程では「教科及び教科の指導法に関する科目」のうち「教科に関する専門的事項」はこれまでの「英語学」「英米文学」「英語コミュニケーション」「異文化理解」の 4 区分から、「英語学」「英語文学」「英語コミュニケーション」「異文化理解」に変更となる。この変更を受けて、自己点検を踏まえて「英語文学」の教授内容等について考察する。

1 「英米文学」から「英語文学」へ／英米文学辞典・事典から英語文学辞典・事典へ

言語と文学の関係は切り離して考えることはできない。英米文学という場合には英文学（イギリス文学）と米文学（アメリカ文学）の総称というのが一般的な解釈である。しかしここで言う英米とは国名を指していることになる。しかし、冒頭に述べた通り、言語と文学が密接なかが

わりを持つ以上、英米文学と言う場合には英語で書かれた文学という大きな枠組みがある。日本の英語教育においてもイギリス英語、アメリカ英語が文法や発音、さらには綴り字が異なることからその取扱いが微妙なところがあったが、すでに World Englishes という考え方により、コミュニケーションとして成立することに主眼が置かれるようになった。文学においてこれまで「英米文学」とした場合には英語文化圏において英語で書かれた文学が取り扱うことができないというという事態があった。アイルランド、インド、カナダでは公用語が複数あり、その中に英語が含まれている。オーストラリア、ニュージーランドなどもオーストラリア英語、ニュージーランド英語とも呼ばれるが、こうした国にももちろん英語で書かれた英語文学がある。今回の変更により英国、米国という国というより、あきらかに英語という言語を中心に考えた変更である。象徴的なこととしてジェニー・ストリンガー編／浦谷計子他訳『オックスフォード世界英語文学大事典』(DHC、2000年9月)、上田和夫他編『20世紀英語文学辞典』(研究社、2005年11月)、木下卓他編『英語文学事典』(ミネルヴァ書房2007年4月)の出版もある。『オックスフォード世界英語文学大事典』は Jenny Stringer, editor. *The Oxford Companion to Twentieth-Century Literature in English* (1996)の翻訳である。“Editor’s Foreword”には以下のようにある。

The aim of this book is to present an overview of literature in English from 1900 to the present day in a single volume. Representing as it does all geographical areas of the Anglophone world and a wide range of writing, *The Oxford Companion to Twentieth-Century Literature in English* is intended to be read for pleasure as well as being a useful source of information to students and teachers of literature. Its scope extends from the United Kingdom, Ireland, and America, to Australia, Canada, New

Zealand, Asia, Africa, and the Caribbean. (1)

『20世紀英語文学辞典』(2005)の上田和夫・渡辺利雄・海老根宏「まえがき」には以下のようにある。

『20世紀英語文学辞典』は、表題どおり、英語圏諸国における20世紀の主要な文学者、文学作品、文学理論、批評用語、文学運動、大衆文化、社会背景など、約5000項目の情報を総合的に解説した辞典である。…以下省略…

20世紀はまず、科学技術が著しい進歩発展を遂げた時代だといわれているが、21世紀の冒頭に立って、過去100年の歴史を振り返ってみると、文学創造の面でもさまざまな実験が行われ、その変化発展は科学の分野に劣らず、めざましい、豊かなものがある。また、文学の本質、目的、解釈方法をめぐっても、革命的な新しい理論が現われ、文学研究は百科争鳴といった観さえ呈している。そうした中で、世紀の変わり目をはさんで、英米での20世紀文学を中心とする *Oxford Companion to Twentieth-Century Literature in English* (1996)をはじめ、各ジャンル別の *Contemporary Authors* シリーズ、20世紀文学を中心とする *Dictionary of Literature Biography (DLB)*、*Encyclopedia of Post-Colonial Literature in English* (1994)などが刊行され、われわれに新しい視野と情報を提供している。本書は、こうした海外の文学辞典類に加えて、*Who's Who, Dictionary of National Biography (DNB)*など基礎的な資料や、文芸誌・書評誌なども十分に参考にしつつ、独自の視点に立って、日本の読者のために、20世紀英語圏の文学の理解に役立つよう編集を心がけた。(2)

木下卓他編『英語文学事典』(ミネルヴァ書房、2007年4月)の「まえがき」には「文学」そのものへの見直しという点が指摘されている。

80年代以降の英米文学研究の世界も大きく様変わりした。「正典(canon)」の見直しに典型的に表れているように、文学の歴史を把握し、編成する原点そのものに特定の支配的イデオロギーや価値観が反映されていることが指摘されはじめ、そのような視点からとらえられた文学観そのものが問い直されるに到った。そもそも私たちが<文学>だと信じてきたものは、時代のパラダイムにすぎなかったのではないか。そこに存在すると信じてきた実存や人生や文化や思想や美意識といった認識の枠組みそのものが、何かを特権的に選別し、同時に何かを排除する一定の価値観もしくはイデオロギーの装置にすぎなかったのではないか。ある作品を傑作と判断し、ある作品を駄作と判断する。その基準そのものが<文学>という制度の所産にすぎないのではないか。こうした懐疑が<文学>という世界の自明性を突き崩していったのである。⁽³⁾

他にも横山幸三監修『英語圏文学—国家・文化・記憶をめぐるフォーラム』(人文書院、2002年5月)、木下卓・窪田憲子・高田賢一・野田研一・久守和子編著『英語文学事典』(ミネルヴァ書房、2007年4月)、風呂本惇子・松本昇編『英語文学とフォークロア—歌、祭り、語り』(南雲堂フェニックス、2008年12月)、木村茂雄・山田雄三『英語文学の越境—ポストコロニアル／カルチュラル・スタディーズの視点から』(英宝社、2010年4月)、栗原裕『英語文学論』(開拓社、2011年10月)、菊池繁夫・上利政彦『英語文学テキストの語学的研究法』(九州大学出版会、2016年3月)、鈴木秀一・江藤章能『授業力アップのための英語圏文化・文学の基礎知識』(開拓社、2017年5月)など、英語で書かれた文学という観点から研究書もすでに出版されているところである。しかし、いずれにしても英語文学の中でも英米文学が中心的なものであることは変わらない。ちなみに、外山滋比古他編『英語名句事典』(1984)

は日本で初めて出版された英語名句事典であるという。(4)

2 「英語文学」の担当に際して

筆者はこれまで「英米文学」に関する科目をいくつか担当してきた。また、必ずしも「～文学」という科目名でなくとも、授業において英米文学、あるいは英語文学を取り扱ってきた。その担当歴をまず列举してみたい。

「地域研修旅行」(武蔵野短期大学国際教養学科、1993 年度～2005 年度)

「英文学概論」(武蔵野短期大学国際教養学科、1993 年度～2003 年度)

「現代西欧(EU)事情Ⅰ」(武蔵野短期大学国際教養学科、2003 年度～2005 年度)

「現代西欧(EU)事情Ⅱ」(武蔵野短期大学国際教養学科、2004 年度)

「西欧社会文化事情」(武蔵野短期大学国際教養学科、2005 年度)

「西欧文化事情Ⅰ」(武蔵野学院大学国際コミュニケーション学部国際コミュニケーション学科、2004 年度～2007 年)

「英語講読」(武蔵野学院大学国際コミュニケーション学部国際コミュニケーション学科、2004 年度～現在に至る)(2015 年度より科目名称が「英書講読」となり、読み替え科目として担当)

「英米文学史」(武蔵野学院大学国際コミュニケーション学部国際コミュニケーション学科、2004 年度～現在に至る)

「国際文化交流」(武蔵野学院大学国際コミュニケーション学部国際コミュニケーション学科、2004 年度～現在に至る)

「英語圏文化研究 a」(駒澤大学学部共通科目、2015 年度)

語学ではなく、英米文学関係に関連した科目を最初に担当してからす

に 20 年以上を経過した。「西欧文化事情 I」「英語講読」「英米文学史」「国際文化交流」については大学設置及び教職課程設置時の着任のため、それぞれ当局の審査を受けての着任である。

3 シラバスと授業計画

シラバスは一般的に「到達目標」「授業概要」「授業計画」「評価基準及び評価方法」「教科書及び参考書」で構成される。これ以外ではオフィス・アワーや事前準備（予習）及び事後の学習（復習）に要する時間、当該科目を受講する際の事前履修科目などを明示する場合がある。筆者は「教育実践例 教材に関する学生の反応と指導—英米文学史—」（『武蔵野教育研究』第 3 巻第 10 号、2017 年 8 月）において、「英米文学史」のシラバス等については論じてきたため、本稿では「英語圏文化研究 a」について取り上げるものとする。a とは前期を指し、b が後期配当になっている。筆者は前期だけを担当した。

- 第 1 回 英語圏及び文化に関する定義について。
- 第 2 回 英語圏及び文化に関する定義の補足。
- 第 3 回 イギリスとは？イギリスと言えば？
- 第 4 回 イギリス文学史を中心にしたイギリス文化史
- 第 5 回 ファンタジーからネオ・ファンタジーへ
- 第 6 回 アメリカとは？アメリカと言えば？
- 第 7 回 アメリカ文学史を中心にしたアメリカ文化史
- 第 8 回 フロンティアの消失からニュー・フロンティアへアメリカン・ドリームとは何か
- 第 9 回 英米文学の特徴
- 第 10 回 演劇の国・イギリス
- 第 11 回 映画の国・アメリカ

第12回 紅茶から見るイギリスとアメリカ

第13回 Internationalization, Globalization, Glocalization とは何か

第14回 イギリス文化アイテムとアメリカ文化アイテム

第15回 英語圏文化についての総論

当該科目は文学部英米文学科を除いた全学共通科目の取り扱いである。なお、配当年次は1~4年生である。そのため、英米文学や英米文化を中心に授業内容を構成した。英語文学という考え方については英語圏の定義の中で「言語、文学、文化」を中心に取り上げた。「第1回 英語圏及び文化に関する定義について」「第2回 英語圏及び文化に関する定義の補足」はおもに英語圏あるいは英語文化圏の概要について講義を行った。選択科目のため、1回目を欠席する学生もいるため、1回目の授業の内容を振り返ると共に補足を行った。

授業はおもにパワーポイントと補助教材を併用して進めた。

実際の内容

英語圏 → 言語圏
文化研究
→ Cultural Studies
言語と文化の関係は？

英語圏

言語によって文化圏を形成する。英語を公用語、国語として定められている国や地域の総称。

英語圏

言語によって文化圏を形成する。英語を公用語、国語として定められている国や地域の総称。
主要国 →



英語圏

English-speaking world
World Englishes



English as a Second
Language
English as a Foreign
Language
World Englishesという考
え方をどうとられるか？

English as an
International Language
English to Speakers of
Other Language
English as a Native
Language

以上は、授業で使用したスライドの一部である。さらに、授業では国家・民族、言語、文学について触れた。

また、当時の講義録よりその一部をここに転載しておきたい。以下は当時 web 上に公開した講義教材である。

第1回 (1) オリエンテーション。(2) 英語圏とは何か。(3) 文化とは何か。

(1) オリエンテーション

省略(授業の進め方、評価基準及び評価方法の確認)

(2) 英語圏とは何か

英語圏(English-speaking world)は、公用語や国語として英語が定められている、あるいはそこに住む人々が主に話す言語が英語である国・地域の総称。歴史的にイギリスの植民地であった地域が、英語圏になっている場合が多い。言語によりフランス語圏、ドイツ語圏等が形成されている。本講義では英語圏を主に取り扱い、他の言語圏は場合により非英語圏として取り上げることがある。また、英語圏も広いので、本講義ではおもにイギリスとアメリカを中心に取り上げる。従って個々で主に扱う英語圏文化とは「イギリス文化」「アメリカ文化」となる。

(2の2) 公用語とは

英語では **official language** と表現する。簡単な定義は以下の通り。

「ある国家で公式の使用のために定められた言語。多くの場合、その国の国語と一致するが、多民族国家などの場合、国語以外の言語も公用語として認められることがある。たとえばシンガポールではマレー語を国語と定めているが、そのほかに中国語、タミル語、英語が公用語として認められている。」

(<https://kotobank.jp/word/%E5%85%AC%E7%94%A8%E8%AA%9E-63303>)(2015年2月25日アクセス)

国際連合憲章 (Charter of the United Nations) は、1945年に制定され、同憲章が規定する国連の公用語は中国語、英語、フランス語、ロシア語、スペイン語の5カ国語で、1973年、アラビア語が公用語に追加された。現在は6ヶ国語。

国際連合安全保障理事会常任理事国は5ヶ国。

アメリカ合衆国	公用語	英語 (米語)
イギリス	公用語	英語
フランス	公用語	フランス語
ロシア	公用語	ロシア語
中華人民共和国	公用語	中国語

(2の3) 英語を公用語とする主な国・地域

英語が、国語・共通語・公用語になっている主な国・地域。歴史的背景や民族等の問題により、国語、共通語としてしている場合がある。日本のように日本語を公用語として規定してない場合もある。このような場合には国語という扱いになる。

<ヨーロッパ>

イギリス (国語) (ウェールズではウェールズ語も公用語。)

アイルランド (共通語) (第二公用語) (アイルランド語が第一公用語。
マルタ (公用語) (マルタ語も公用語。)

<北アメリカ>

アメリカ合衆国 (国語) (ハワイ州を含めて 27 の州が独自に英語を公用語にしている。ニューメキシコ州ではスペイン語、ハワイ州ではハワイ語、ルイジアナ州ではフランス語も公用語。)

カナダ (共通語) (公用語) (フランス語も公用語)

<中央アメリカ>

ジャマイカ (共通語)

セントクリストファー・ネービス (共通語)

ドミニカ国 (公用語)

トリニダード・トバゴ (共通語) (公用語)

バハマ (共通語)

プエルトリコ (アメリカ自治領) (米)

<南アメリカ>

フォークランド諸島 (共通語) (イギリス自治領)

<アジア>

イスラエル (ヘブライ語が公用語で、他にアラビア語)

インド (補助公用語) (ヒンディー語が公用語)

シンガポール (公用語) (中国語、マレー語、タミル語も公用語。他にベンガル語。)

パキスタン (公用語) (パシュト語も公用語。他にシンド語。)

フィリピン (公用語) (フィリピノ語も公用語。)

ブルネイ (マレー語が公用語。)

香港 (公用語) (広東語も公用語。)(中国特別行政区)

<アフリカ>

エチオピア (主要言語はアムハラ語・ティグリグナ語)

カメルーン (公用語) (フランス語も公用語)

ケニア（準公用語）（スワヒリ語も公用語。）

ナイジェリア（公用語）

モーリシャス（公用語）（フランス語も公用語）

南アフリカ（公用語）（他にも公用語あり）

<オセアニア>

オーストラリア（国語）

ニュージーランド（国語）（公用語）（マオリ語も公用語）

（3）文化の定義

3つの要素（言語・宗教・民族）と言われている。佐々木は、これに「教育」という要素を加えたい。もちろん教育の背景には国の教育政策があることは当然のことだ。

.....

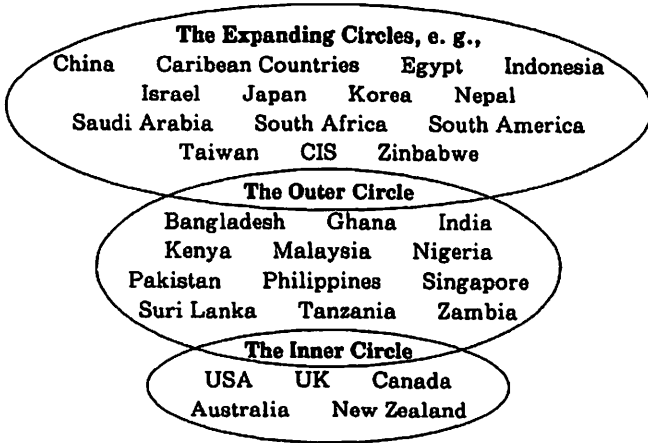
第2回 （1）授業の進め方の確認 （2）英語圏の定義の補足 （3）文化の定義の補足

（1）オリエンテーション

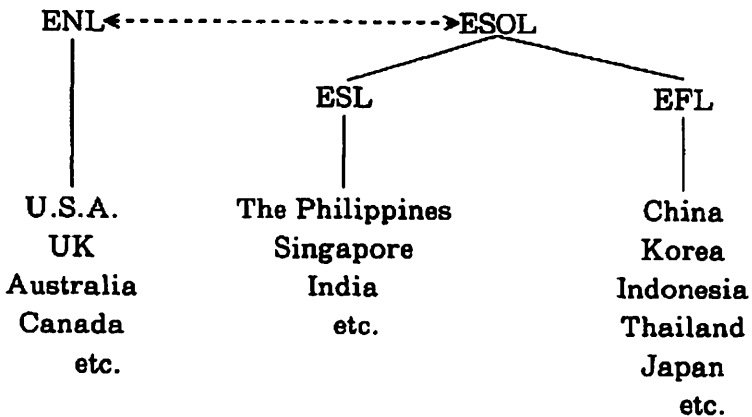
省略（授業の進め方、評価基準及び評価方法の確認）

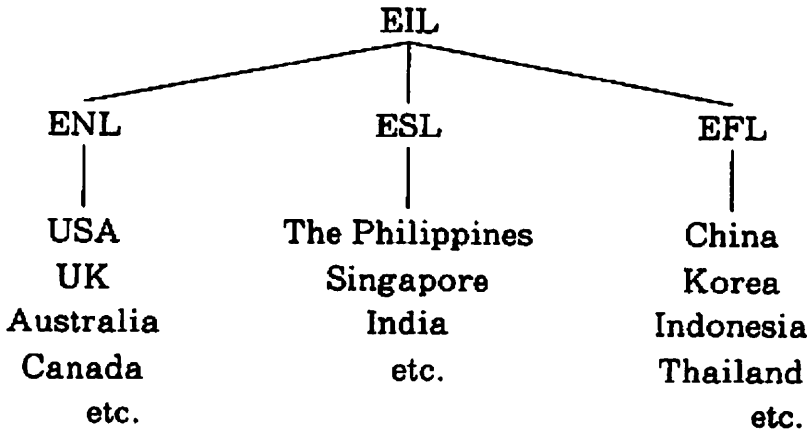
（2）英語圏の定義の補足

英語圏（English-speaking world）とは、公用語や国語として英語が定められている、あるいは、そこに住む人々が主に話す言語が英語である国・地域の総称。重要なことは英語を国あるいは地域として公用語あるいは国語として定めているかどうか。従って歴史的に見ても大英帝国のもと植民地が英語圏になる大きな要因となる。現在では政治的にアメリカが強国になっているため、イギリス、アメリカが中心となっている。しかし、英語も World Englishes という考え方がある。



- 国際語としての英語 English as an International Language
- 他言語話者への英語 English to Speakers of Other Language
- 母語（第一言語）としての英語 English as a Native Language
- 第二言語としての英語 English as a Second Language
- 外国語としての英語 English as a Foreign Language





大坪喜子「World Englishes:その概念と日本の英語教育へ意味するもの」(『長崎大学教育学部紀要 教科教育学』第33号、1999年)より引用

1995年あたりから World Englishes という考え方があり、日本の英語教育でもイギリス英語(英語)からアメリカ英語(米語)へ推移しているが、発音や文法等もイギリス英語、アメリカ英語、オーストラリア英語、ニュージーランド英語では異なるが、全く通じないわけではない。ここで重要な考え方が言語運用能力なのか、コミュニケーション能力なのかということだ。

言語運用能力

話す、聞く、書く、読む力は文法等の基礎力から成り立つもので、言語を正確に使いこなす能力コミュニケーション能力

コミュニケーション能力の最大の特徴は自分が伝えたい内容を伝えられるか、相手が何を伝えたいのかを理解する能力。これらに社会的

状況が加わり、TOP (time, occasion, place)が重要となる。

Pigin English をどう考えるか？

基盤となる英語に中国語・ポルトガル語・マレー語などが混合した言語。特に貿易等で英語が現地の言葉と融合、混在してできた表現。相手に伝えることが言語の主な役割とすれば、正しい英語というよりも伝わる英語が重要ということになる。ここにピジン英語を無視することができない点がある。文法等からすれば誤りであるが、、外国人が使う日本語でも同様のことが起きている場合がよくある。

(3) 文化の定義の補足 省略

4 英国史から見る英語文学

「英米文学」は英語文学、米語文学というよりは英国文学、米国文学を短縮して総称した表現として考えることができる。英国も米国もその公用語が英語であるため、文学自体は国名を冠にしている。なお、言語としての英語は米国では英国とは異なった発達を遂げたため、イギリス英語、アメリカ英語と言うこともある。従って、イギリスが覇権を握り、

「英文学＝英語文学」という時代があった。英国は帝国主義による植民地の拡大に伴い英語圏が拡大していった経緯がある。やがて、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、インドが独立していく。

<u>国名</u>	<u>独立年月日</u>
アメリカ合衆国	1776年7月4日
カナダ	1867年7月1日
オーストラリア	1901年1月1日

ニュージーランド	1947年11月25日
インド	1947年8月15日
アイルランド共和国	1949年3月17日

カナダにはルーシー・モード・モンゴメリ (Lucy Maud Montgomery、1874-1942) という小説家がおり、『赤毛のアン』(*Anne of Green Gables*, 1908)は日本ではよく知られている作品であると共に、英語で書かれている。また、文芸評論家、ノースロップ・フライ (Northrop Frye, 1912-1991) は、20世紀で最も影響力をもった文学理論家のひとりとも言われている。『批評の解剖』(*Anatomy of Criticism*, 1957)、『ノースロップ・フライのシェイクスピア講義』(*Northrop Frye on Shakespeare*, 1986)などが有名である。上田和夫他編『20世紀英語文学辞典』(2005)の浅井晃「Canadian Literature in English」の冒頭では次のような説明がある。

1867年イギリス領北アメリカは、Confederationを形成し、Dominion of Canadaとして独立国となったが、30余年後に迎えた20世紀初頭において、なお文化的風土は、Quebec州を除いてイギリス色の濃いものであった。カナダ文学という概念はほとんど認識されておらず、否定する論評すら見られた。⁽³⁾

オーストラリアのパトリック・ホワイト (Patrick White, 1912-1990) は、オーストラリアの小説家であるが、1973年にオーストラリアで初めてノーベル文学賞を受賞した。『オックスフォード世界英語文学大事典』(2000)では「ホワイト」の項目は掲載されているが、ノーベル文学賞受賞についての記述がない。一方、『20世紀英語文学辞典』(2005)の加藤めぐみ「Australian Literature」では次のように説明されている。

英語で書かれた文学に限定すれば、1788年の入植開始以来19世紀後半にはすでに独自の文学が生まれていたものの、20世紀になって本格的に「オーストラリア文学」が書かれ始めたといえよう。・・・中略・・・

Anglo-Celtic系のいわゆる主流派としては、P.Whiteが閉鎖的な社会派リアリズムというオーストラリアの特異な文学的状况を拒否しつつも、ヨーロッパの伝統とオーストラリア的要素を融合され、そこから普遍的真理をひきだして小説に描き、1973年にはオーストラリアに初のNobel文学賞をもたらした。⁽⁴⁾

ニュージーランドのウェリントン生まれのキャリン・マンسفールド(Kathleen Mansfield Beauchamp, 1888-1923)はロンドンへ遊学した女流作家である。短編集に『幸福』(*Bliss and Other Stories*, 1920)、『園遊会』(*The Garden Party and Other Stories*, 1922)で知られるが、英文学の範疇で取り扱われることもある。『20世紀英語文学辞典』(2005)の澤田真一「New Zealand Literature」の冒頭で次の様に述べている。

1840年に先住民族マオリ(Maori)とヨーロッパ系白人パケハ(Pakeha)の間で結ばれたWaitangi条約により、ニュージーランドはイギリスの植民地として出発する。劣悪な執筆環境ゆえに、作家としての大成を目指してイギリスに渡るといふ。‘Mansfield’に代表される20世紀初頭までの才能流出の段階を経て、1930年代にようやくニュージーランドは、国文学の意識の高揚を迎える。その機となったのが、Curnowを中心とするオークランドの若い詩人グループによる文芸誌*Phoenix*の出版であり、のちに「国文学の父」と呼ばれる‘Sargeson’の短編集の発表であった。⁽⁵⁾

マンسفールドは英文学でも取り扱われている。

5 ノーベル文学賞受賞者、ボブ・ディランと英語文学

2016年10月13日にアメリカのボブ・ディラン（75歳）がノーベル文学賞を受賞したというニュースが流れた。ボブ・ディラン（Bob Dyran, b.1941）はノーベル賞受賞スピーチの最後で次の様に述べている。

But, like Shakespeare, I too am often occupied with the pursuit of my creative endeavors and dealing with all aspects of life's mundane matters. "Who are the best musicians for these songs?" "Am I recording in the right studio?" "Is this song in the right key?" Some things never change, even in 400 years. Not once have I ever had the time to ask myself, "Are my songs literature?"⁽⁶⁾

ミュージシャンであるボブ・ディランの楽曲の詞が文学であるかどうか。彼自身も自問自答を繰り返している。このノーベル文学賞の受賞の意味は、楽曲の詞も文学の詩と同様であるということの意味することになる。英語の教材として考えた場合には、英語表現やリズムと言う観点から取り扱うことが多い。しかし、歌詞が文学であるならば、今後はこうした英語の歌詞も英語文学として取り扱うことができるということになる。『オックスフォード世界英語文学大事典』（2000）の河野一郎「監修者まえがき」に以下のような文章があるので紹介しておく。

収録された作家は、サミュエル・ベケット、イーディス・ウォートン、T.S. エリオット、D. H. ロレンス、テネシー・ウィリアムズ、ウラジミール・ナボコフらの著名ないわゆる大家から、アナイス・ニ

ン、ボブ・ディラン、トニ・モリスン、サルマン・ラシュディ、ナディン・ゴードイマなど、比較的最近になって注目されはじめた作家までカバーしている。(7)

なお、項目として取り上げられている“DYAN, Bob (1941-)”の冒頭を紹介しておきたい。

American songwriter and singer, born in Duluth, Minnesota, educated at the University of Minnesota. Originally named Robert Zimmerman, he became known as Bob Dylan I 1962. *The Freewheelin' Bob Dylan* (1963) and *The Times They Are A'Changin'* (1964) made him internationally famous as the leading 'protest singer' of the day. Much of his most impressive work was recorded on *Highway 61 Revisited* (1965) and *Blonde on Blonde* (1966) personal and socio-political themes combining in lyrics of considerable imaginative scope and incisiveness. (8)

同様に、『20世紀英語文学辞典』（2005）でも渡辺利雄「Dylan /dɪlən/, Bob'(1941-）」として取り上げられているので、その冒頭を紹介しておく。

アメリカのユダヤ系フォークシンガー・詩人・作曲家。本名 Robert Thomas Zimmerman。Dylan の名前は Dylan Thomas に因む。Minnesota 州 Duluth 生まれ。Minnesota 大学をドロップアウトして、New York に出、Woody Guthrie などの影響を受けながら、Newport Folk Song Festival (1963)に参加し、注目される。(9)

ちなみに、イギリスを代表する The Beatles も項目が掲載されている。

なお、木下卓他編『英語文学事典』(2007)には「ボブ・ディラン」の項目は掲載されていない。「英語文学」は単に英米文学が英語に変わったという単純なものではなく、「英語で表現された」という意味合いが強くなったとともに、「文学」の捉え方も変化してきたと考えられる。この意味では「英語文学」という考え方自体がまだはっきりと定着していないのではないかとも思える。

エピローグ

「英語文学」(Literature in English)は国ではなく、言語を優先にした考え方である。英語文学は英語で書かれた文学であるが、英語の歴史を見れば、その中心は英文学、その後は英米文学が中心となっていることは否定できない。英語で書かれた文学としてカナダ文学、オーストラリア文学、ニュージーランド文学などが教職課程の英語文学に含まれるようになったが、カナダ文学、オーストラリア文学、ニュージーランド文学の作家、その作品等がどのような形で生徒に触れられているかが大きな鍵ではないだろうか。アリス、プーさん、ピーター・ラビットは小さなころから絵本やディズニーなどを通して知っていることはあっても、カナダ文学、オーストラリア文学、ニュージーランド文学では『赤毛のアン』ぐらいがせいぜいのところではないだろうか。これは生徒だけではなく、英語科教員であってもカナダ文学、オーストラリア文学、ニュージーランド文学に親しんでいる者も少ないのではないだろうか。今回、教職課程の「教科に関する専門的事項」が「英米文学」から「英語文学」に変わったが、現状では英米文学がやはり核となっていることは確認しておきたい。カナダ文学、オーストラリア文学、ニュージーランド文学の歴史が浅いこともあり、今後、文学としてその英語表現が辞書等の例文などへの反映される度合いや作品の映画化により、どのように周知されていくのかなどの動きにも注目していきたいものだ。

注

- (1) Jenny Stringer, editor. *The Oxford Companion to Twentieth-Century Literature in English*. Oxford: Oxford University Press, p.vii.
- (2) 上田和夫他編『20世紀英語文学辞典』(研究社、2005年11月)、p.v.
- (3) 木下卓他編『英語文学事典』(ミネルヴァ書房、2007年4月)、pp.i-ii.
- (4) 外山滋比古他編『英語名句事典』(大修館書店、1984年3月)、p.iii.
- (3) 浅井晃「Canadian Literature in English」(上田和夫他編『20世紀英語文学辞典』)、p.219.
- (4) 加藤めぐみ「Australian Literature」(上田和夫他編『20世紀英語文学辞典』)、pp.67-68.
- (5) 澤田真一「New Zealand Literature」(上田和夫他編『20世紀英語文学辞典』)、p.1008.
- (6) 「ボブ・ディランさんのノーベル賞受賞スピーチ(英語全文)」
<http://www.nikkei.com/article/DGXMZO10538020R11C16A2I00000/>(2017年8月2日アクセス)
- (7) 河野一郎「監修者まえがき」(ジェニー・ストリンガー編/浦谷計子他訳『オックスフォード世界英語文学大事典』)、p.i
- (8) *The Oxford Companion to Twentieth-Century Literature in English*, p.187.
- (9) 渡辺利雄「Dylan /dɪlən/, Bob'(1941-)」(上田和夫他編『20世紀英語文学辞典』)、p.392.

【キーワード】 英語文学、英語圏文化、英米文学